

1 丹沢大山の自然環境の保全と再生に関する研究開発

- (1) 課題名 1-3 自然環境の統合的な管理技術の研究開発
A 流域を対象にした土壌保全マニュアルの作成
- (2) 研究期間 平成 19 年度
- (3) 予算区分 県単（水源特別会計：丹沢大山保全再生対策）
- (4) 担当者 内山佳美

(5) 目的

丹沢大山地域では、ニホンジカの過密化により林床植生が衰退し、それにより土壌の侵食が進行している。土壌侵食の著しい箇所は、ニホンジカの過密化している高標高域に集中しているが、特別保護地区に指定されているため、これまで土壌保全の直接的な対策は行われてこなかった。しかし、植生保護柵等の既存の手法では設置に限界があるため、平成17～18年度にかけて検討および施工試験により環境負荷が小さい直接土壌を保全する対策の改良・開発を行ってきた。平成19年度からは事業部門で本格的に施工しているが、今後も再生事業として順応的に実施されるため、事業説明資料や普及用資料として、改良・開発した手法について考え方や施工方法を分かりやすく取りまとめた。

(6) 研究方法

土壌保全マニュアル素案の取りまとめ

これまでの取り組みをもとに、マニュアルの素案を取りまとめた。

検討会議の開催

現地の土壌侵食実態調査や試験施工のモニタリング調査などを県からの受託研究で実施してきた東京農工大学に監修を依頼した。

学識者等による検討会議を開催し、マニュアルの素案について意見をいただいた。

土壌保全マニュアルの再編集

検討会議での議論をもとに、内容を編集しなおした。印刷用原稿の作成にあたっては、NPO法人エンビジョン環境保全事務所に協力を依頼した。

(7) 結果の概要

土壌保全マニュアル素案の取りまとめ

既存資料をもとに、素案を取りまとめた。

- ・平成17～18年度丹沢大山保全緊急対策事業報告書
- ・東京農工大学の受託研究報告書（平成16～18年度）

・丹沢大山自然再生計画、神奈川県ニホンジカ保護管理計画等の行政計画 ほか

検討会議の開催と土壌保全対策マニュアルの再編集

東京農工大学において3月に検討会議を開催した。

検討会議の委員

氏名	所属役職	専門
石川芳治	東京農工大学大学院共生科学技術研究部 教授	砂防
白木克繁	東京農工大学大学院共生科学技術研究部 講師	森林水文
鈴木 透	酪農学園大学環境システム学部 助手	森林情報管理学
鈴木雅一	東京大学大学院農学生命科学研究科 教授	森林水文、砂防
龍原 哲	東京大学大学院農学生命科学研究科 准教授	森林計測学
富村周平	(株)富村環境事務所 代表取締役	森林
中村太士	北海道大学大学院農学研究院 教授	森林管理学
羽澄俊裕	(株)野生動物保護管理事務所 代表取締役	野生動物保護管理学

検討会議の主な意見と対応状況

検討会での質問・意見	対応状況
<p>マニュアルの構成について、もっとすっきりできるのではないか。</p> <p>手順、推進方法などの言葉が見出しに何度もでている。レベルが違うのだろうが、もう少しすっきりできないか。</p> <p>工事のところばかりが詳しくすぎないか。</p> <p>対策工について、詳しく書かれているが、それ以前に対策工を施工すべきところとしなくてもよいところがあるだろう。現状を評価した上で、直接的な対策工が必要な箇所はどんな箇所なのか盛り込んだほうがよいのではないか。</p> <p>調査資料の保管整理について、書き込むべき。</p> <p>大きめの柵と対策工の組み合わせについても触れるべきだろう。</p>	<p>4部構成にまとめた。</p> <p>手順の類はすべて削除し、本質的な内容を中心に記載するよう再編した。</p> <p>工法等の詳しくすぎるところは削除。別途技術資料としてWeb掲載を検討。</p> <p>国定公園特別保護地区で林床植生の被度8割未満の箇所を対策の候補地とし、さらにも中でも優先的な箇所に集中して施工するという整理にした。</p> <p>計画、実行、モニタリング・検証のそれぞれで実績情報整備や調査データ整備を記述した。</p> <p>工法選定のところで文章で記載した。</p>

(8) 課題

- ・作成したマニュアルのWeb公開や印刷物として配布するなど広く活用する。
- ・今後もモニタリングと技術検証を継続し、随時マニュアルを改訂していく必要がある。

(9) 成果の発表

神奈川県自然環境保全センター（2008）丹沢大山自然再生 土壌保全対策マニュアル